

## キュウリ（ハウス抑制無加温）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作 型												
主な作業	播 種      接 ぎ 木      定 植      収 穫 開 始      収 穫 終 り											

## 技術体系

### 1 作型の特徴

ハウス無加温栽培は盛夏期から低温期にかけての栽培である。育苗期から定植、収穫初期までは、高温により徒長的な生育になりやすい。換気、灌水、また、梅雨期の寡日照多湿などにも留意して管理する。また、この作型はアブラムシによるウイルス病が多発しやすいので育苗から本葉5葉期まではハウスサイドに寒冷紗を張り、アブラムシを回避する。

### 2 適応地域

全域

### 3 栽培条件

#### (1) 温度

発芽は最低限界で 15℃、適温は 25～35℃、最高限界は 40℃であるが、床温 25℃前後が適温で、高温過ぎると発芽は早まるが徒長し、低温になると子葉の展開が遅れる。50℃前後の高温にあうと短時間で茎葉に壊死を生じる。光合成の適温は 25～32℃とされるが、栽培上は昼間 23～28℃、夜間は 17～18℃、最低 12℃以上に保つ必要がある。地温は少なくとも 15℃以上必要で、20～23℃が適温である。

#### (2) 光

光飽和点は 5～6 万ルクスで、トマトのような強い光は必要としない。光合成は一般に早朝から午前中に盛んに行われる。したがって午前中に充分光を与えることが必要である。

### (3) 土壌条件

浅根性で、比較的乾燥に弱い。また、過湿では根系の発達が悪く、生育不良となる。砂質土では生育は早い、老化も早く、粘質土の場合は生育が遅れる。腐植に富み、膨軟な深い土壌が適する。土性に関しては酸性に弱く、好適 pH は 6～7 である。

### (4) 空中湿度

低すぎると、茎葉や果実の生長が抑制され、高いほど生長は促進されるが、過度の多湿は病害発生の誘引となる。

### 4 施設装備

#### (1) 単棟ハウス

#### (2) 防除機

### 5 経営目標

#### (1) 収量 10 t/10a

#### (2) 投下労働時間 1, 150 時間/10a

#### (3) 所得率 45%

#### (4) 経営規模 20 a

（家族労働力 2 人の場合）

## 栽培技術

### 1 品種と特性

「アルファー節成」「輝姫」「エクセレント節成 353」など

#### 【台木】

「昇竜」「NEWスーパー雲龍」「ゆうゆう一輝（黒タイプ）」など

ブルームレス台木。草勢維持が容易で収量性が高いものを選ぶ。

## 2 育苗

### (1) 育苗ハウス

播種床は、水稻育苗箱等を利用するかあるいは平床を作り、床土の厚さ5～7 cm程度、広さ5 m<sup>2</sup>準備する。

育苗面積は12 cmポリポット使用で50～60 m<sup>2</sup>が必要となる。発芽適温は25～30℃で、通気性、排水性の良い膨軟な床土の場合は浸種しないで播種する。

### (2) 播種

播種期は6月上旬～7月上旬とし、播種量は穂木、台木等も10 a当たり2,200粒を要する。台木はブルームレス台を使う。

### (3) 接ぎ木及び鉢上げ

接ぎ木適期の苗令は、穂木が本葉1枚、台木は子葉展開時とする。接ぎ木法は一般的には呼び接ぎとし、接ぎ木と同時に鉢上げを行う。

### (4) 接ぎ木後の管理

軟弱徒長にならないように換気を十分行い、温度を下げる。接ぎ木後3日程度はしおれないよう昼間寒冷紗で被覆する。灌水は夜間まで水分が残らないように午前中に行う。高温期の育苗で徒長しやすいので、葉が重ならないよう早めに鉢ずらしを行う。

## 3 本圃準備

圃場は深耕を行い、有機物を施肥肥沃度、通気透水性、保水性を高めておく。また、暗きょ排水やハウスの回りの明渠の設置など、排水対策を実施しておく。マルチは降温、雑草抑制、害虫の忌避からシルバー系を利用すると良い。

### (1) 施肥

施肥量 (kg/10a)

	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O
基 肥	1 8	2 5	1 8
追 肥	1 5	1 5	1 5
合 計	3 3	4 0	3 3

堆きゅう肥は2 tを目安とし、土壌の状態、堆きゅう肥の品質を考慮して施用する。また、休耕期間中に緑肥作物を栽培し、土壌にすき込む等、地力の維持、増進を図る。

施肥は、利用効率を良くするため、基肥は植穴施用や溝施用など、局所施肥を行う。肥料の種類は、有機質肥料を主体として使用する。また、土壌診断に基づき石灰等の改良資材の投入を行い、基肥は定植10日以上前に施用する。

### (2) 栽植様式

畦幅1.8～2.0 m、株間45 cm～50 cm、栽植本数1200本/10a程度とする。

## 4 定植

本葉3枚半程度で定植する。穂木の自根が表土に着かないように浅植えとする。

定植後は活着までしおれないよう灌水し、活着後から本葉8枚位までは、やや控え徒長を防ぐ。

## 5 温度管理

生育前半の高温対策として、強換気に遮光と通路散水を併用する。遮光は晴天時の10:00～14:00頃を目安に遮光資材等を利用する。後半はハウス内の保温に努め、12℃以下に下がらないように管理する。

## 6 整枝

草勢の充実を図るため、側枝は下位6節まで早めに摘み、7節以上は側枝が2節、残りは1節止めとする。孫づるは草勢に応じて摘心する。主枝は17節～18節確保し、番線下15 cmで摘心し、孫づるから1～2本遊びづるを残し、放任する。収穫中期以降は、主枝の老化葉、病葉などを努めて整理する。特に過繁茂になると、下葉の受光が悪化するばかりか、病害発生の原因となり、落花、不良果を助長する。

## 7 灌水、追肥

前半はハウス内の温度が高いため、徒長を抑えるため活着後は多少灌水量をひかえる。親づる摘心から徐々に増やして、果実肥大、側枝伸長を促す。強

換気で、ハウス内の湿度が不足し、茎葉の老化や果実肥大不良などにつながるため、通路散水など湿度の確保に努める。

低温期の灌水は地温の低下につながりやすいため、晴天時の午前中に行う。

追肥は、第1回目を収穫開始時に固形肥料で施し、以降は液肥中心とする。1回目当たり追肥量は窒素成分 3kg/10a 程度として、草勢に応じて増減する。

## 8 病害虫

主な病害虫には、褐斑病、べと病、斑点細菌病、菌核病、灰色かび病、疫病、うどんこ病、ウイルス病、スリップス、アブラムシ等がある。

(1) 無病苗の選抜

(2) 土壌消毒、湛水除塩、排水、深耕。

(3) 病害被害葉の除去を徹底する。

(4) 苗床での徹底防除及びハウスサイドに寒冷紗等を張り、害虫のハウス内への侵入防止を図るとともに周辺雑草除去に心がける。

## 9 収穫

適期収穫を行い、成りすぎによる養分の競合が起こらないように草勢維持に努める。